# 永明延寿の人間観

森江俊孝

## 一

永明延寿（九〇四～九七五）は唐末五代の擾乱の時代、江南の両浙地方に建国した呉越国に生を受けた。当時の仏教は盛唐以来の伝統仏教を最も良く継承したが、建隆元年、宋の太祖の仏教復興によって、従前の六朝から隋唐にかけての中国仏教の伝統的性格は除々に変化の兆をみせてきた。つまり、経論研究を尚ぶ学解仏教から実践実行を重んじる求道弘法の実践仏教へと推移する過渡的時代であった。この様な時期に生きた彼は、特に呉越王銭氏一族の厚遇を受けて五家分立以後の禅宗、殊に法眼の禅風を宜揚し、法眼宗の第三祖、さらに蓮社七祖の一人にも数えられていることは周知の如くである。さて、沙門延寿は現実社会並に仏教界の情勢を凝視し、宗教者としての自覚と認識の基に立脚して、現世に即応する宗教としての仏教の有り方を真摯に絶ゆることなく模索し続けたのであった。本論は永明延寿の人間観と題し、延寿が現世を如何に生きぬき如何に見ていたか、また、そこに生きている人間を如何に見、その人間の本質を如何に追究把捉していったかを考察してみたい。そこでまづ彼の人間像、人間としての生き方の探究が必要となってこよう。これは取りも直さず彼の人間観を通観するための基礎的手続に他ならないから。

## 二

延寿は幼少の頃から非常に強い宗教的気質を具備していたらしく、そのことは諸伝共通して「総角之歳帰心仏乗」と伝えていることからも伺える。また、彼は法華経に対して強い関心を示し、絶えず誦経することによって仏道帰依の念を懐き続けていたものの、自分の引き起した放生事件の発覚により出家するまでには至らなかった。しかし、彼は呉越文穆王の命令によって死罪から免がれることが出来たのである。それは官銭を盗用しての放生行為が、唯生命あるものを済度した

い一心から出たものであり他意なきを王が認めたからに他ならない。延寿の行為の基底には、放生が生命あるものに対する慈悲行であるとの確信、要するに崇高なる宗教的自覚と認識の裏付けがあったのではあるまいか。ここに、たとえ死罪となっても自分は西方極楽浄土に生まれることが出来るのだ、と言う安心が彼をして放生行為をなさしめたのであった。さて、明州の翠巌では雪峯義存の法嗣永明禅師令参が、呉越王銭氏一族の支持を得て活発な活動を展開していたが、時に延寿は令参から出世法を学ぶ機縁に恵まれ、その後杭州の竜冊寺に移った師令参に随喜し、ここに延寿幼少からの出家の夢は実現された。その生活は一食三衣を受け、朝に堂僧への供養、夜には禅観の修得にと日夜厳格な修道に励む毎日を送っていた。その後台州の天台山天柱峯に登った彼は、当時呉越の国師としてその名声高き天台徳韶（八九一～九七二）の門に参禅した。延寿と徳韶の出会いは『景徳伝灯録』巻二十六に、

暨謁韶国師一見而深器之密授玄旨。仍謂師曰。汝与元師有縁。他日大興仏事密受記。　（大正五一・四二一C）

と述べ、ここに延寿は法眼宗の正嫡徳韶から玄旨を密授され法眼の禅風を相承したのである。また彼は天台山の根本道場国清寺において法華懺法を行修している。この時彼は神人の示現に相遇し、その霊告によって自己の歩んだ修行の道を反省、一に終身常に法華経を読誦すること、二に畢生広く群品を利することの二願を起したのである。しかし、実際に彼が修行者としての確信を得たのは智者の禅院羅漢堂における仏祖への精禱であった。彼は一心禅定と誦経万善荘厳浄土の二闡をつくりその帰一を求めた結果、遂に誦経万善生浄土の闡を拈着することが出来たのである。これによって彼は坐禅のみに専念する従来の禅定生活に耽らず、浄土の行業を含めたあらゆる行業を行うべきであるとの信念を確立するに至った。さらに後周の広順二年（九五二）には四明山の別峯、明州雪竇山に住持し、凡そ九年間にわたり坐禅観法、行道念仏などを雙修、その後建隆元年（九六〇）には霊隠寺第一世となり、また翌年には杭州南屏山、慧日永明寺の住山第一世となっている。永明寺における延寿の生活は『楽邦文類』巻三において、

徒衆常二千日課一百八事。学者参問指心為宗。以悟為決。日暮往別峯行道念仏。……忠懿王嘆曰。自古求西方者。未有如此之切也。遂為立西方香厳院。以成師志。　（大正四七・一九五a）

と述べられている。特に、彼は自行化他の行として日課一百八事を実践していたようであるが、これは『智覚禅師自行録』に詳説されている。いま参考までに二三の行修について列記すれば次の如くである。

第一。一生随処常建法華堂。荘厳浄土。
第二。常昼夜六時。普為一切法界衆生。代修法華懺。
第三。常修安養浄業。所有毫善悉皆念念普為一切法界有情。同回

向往生。
第四。或時坐禅。普願一切法界衆生。同入禅智法明妙性。
第五。毎夜上堂説法。普為十方禅衆法界有情。同悟心宗一乗妙旨。
（続蔵二・一六・一・七七左上）

また、晩年になり天台山に登った延寿は七衆のために菩薩戒を授け、さらに夜に鬼神に施食し朝に放生を行ない、また六時に散華行道を行ない、余力に法華経を一万三千部念誦したとも伝えられている。永明寺に住持したまる十四年間、延寿は修道や講説並に著述に多忙な日々を送ったのであった。

以上の如く、彼の伝記を概観して伺える延寿の人間像は、まさに、宗教者として仏者としての自覚を内心に強く懐きつつも、唯自行に満足するのみならず、普ねく衆生のために究極の真理と、それを人に伝えるための教えの真意を解し、自覚覚他覚行円満の大乗仏教の精神を身体をもって生きぬいた人と言えよう。このことは『新編林間後録』において、

永明智覚禅師。乗悲願力示生震旦。伝仏心宗為法檀越。
（続蔵二乙二一・四・三二七右上）

と讃嘆するごとく、まさに、延寿は震旦の法施主にふさわしい人物と言えるのではあるまいか。

## 三

『宗鏡録』百巻は、延寿が自己の宗教体験を基にして打ち立てた思想大系を、諸経論を通して裏付けた学問的な理論書であると言えよう。彼は『宗鏡録』の序文において、

今詳祖仏大意経論正宗。削去繁文。唯捜要旨。仮申問答。広引証明。挙一心為宗。照万法如鏡。編聯古製之深義。撮略宝蔵之円詮。同此顕揚。称之曰録。分為百巻。（大正四八・四一七a）

と述べ、『宗鏡録』の定義づけを行なっている。さらに『宗鏡録』巻一には、全巻の内容を三章に要約しその大綱を提示するに、第一標宗章は禅の宗旨と経論の教説を明示し、第二問答章は仏教諸宗の論説を問答料簡し、第三引証章は広く諸種の経論を引証して唯心の教義を顕揚するためであると主張している。彼は全巻を通して仏典に説くあらゆる教説を検討し、自己の宗義との融合を計っているが、中でも特に仏教諸宗との問題点を考えつつ、諸々の経論を依用して万法唯心と言う法則で一代仏教を統一せんと企てた。また彼は同じく巻一において仏教研究の基本姿勢について次の如く述べている。

若欲研究仏乗披尋宝蔵。一一須消帰自己。言言便冥合真心。但莫執義上之文随語生見。直須探詮下之旨契会本宗。則無師之智現前。天真之道不昧。（大正四八・四一九b）

さらに「教有助道之力。初心安可暫忘。」とも警告し、義上の文言のみに執着して邪見を生じる我々凡流の姿を鋭く指摘しているのである。では延寿自身、宗鏡について如何なる見解を持っていたのであろうか。『宗鏡録』巻六十一において、

諸仏が教跡を敷演されるのは已にその教えを知っている者のためにあらずして、祖師の直指人心は唯未だ明さざる者のために説かれたのである、今の宗鏡は但初機に示して円宗を頓悟させるためであり、若しこの宗旨にあうならば教えの真偽を見ることが必要であると答えている。故に、延寿は宗鏡の中においてわずかに一字を説けども、これは唯心の宗旨を論談せんために他ならないとの確信を持っていたのである。また唯心について問答料簡し疑情を決定すると言いながら、なぜ引証章を設けたのであろうか。『宗鏡録』巻九十四には「信力未深。纖疑不断。」者のために重重に引証し、究理探玄の者をして尽く円宗に入らしめるためであると述べている。このように三章に分けて説示された『宗鏡録』は、仏道を敬慕する人達にとって二つの得益、つまり、一には未信の人をして正信を成し、一念に摂帰して外に馳求せざるがため、二には已信の人をして観力を助成し、理行堅固にして菩提を証せんがため、を約束しているのである。ここに、延寿は我々が宗鏡の法門を信解受持し正念観察して、人のために敷演伝布し施行することの必要性を強調している。しかし、この宗鏡は「祕要之門難信之法」にして我々は絶えず疑情を懐き惑地に落ちるを常としているが、もし三疑（疑自・疑師・疑法）を具えていれば決定して仏道に信入することは不可能であると指摘し、さらに延寿は「今宗鏡所録。皆是正直捨方便但説無上道。随聞一法尽合円宗。」とも断言するのである。要するに我々における課題、それは唯心の本旨に対する大信を起すことに他ならない。ここに、私は「意地清而世界浄。心水濁而境像昏。」との『唯心訣』の言葉に思いをよせたい。仏祖の大道はまさに「無求自得」することの出来る理智円融の法なればこそ「道非心外。在行言前。」と言われる行道の必要性を感じざるを得ないのである。また「聞而不信。尚結仏種之因。学而未成。猶益人天之福。」との『唯心訣』の文は、有情に対する慈悲的救済の一頌とも言え、ここに、我々は人間としての延寿を看取すると同時に、彼の人間観をも推測することが出来よう。

## 四

『万善同帰集』三巻（六巻）は、万法は唯心に帰するとの根本教理に基づく、全仏教にわたる具体的な実践行法を著わしたものであり、その実践は利他行として、衆生の浄土へ指帰することを促すことを説くものであった。特に延寿は、当時禅門の徒が理に執して事を忘れ、教門の徒が事にとらわれ理に迷うを見て両者の偏見を打破し、禅の見地に立って事行を修し万善を行ずべきであるとの所信を表明している。では所修の万善は何を根本とするのであろうか。延寿はこれに対し一切の理事は心性をもって根本となすと答え、理事相即の上に立っ

て万行を修すべき旨を主張している。また、延寿は本論において大乗仏教徒の間に行なわれるあらゆる実践の行業について個々の問題を取り上げているが、『万善同帰集』巻上には、

如今末代宗門中。学大乗人多軽戒律。称是執持小行。失於戒急。（大正四八・九六五b）

と述べ、当時の禅徒が持戒を軽視し誹訪すること指摘している。延寿によれば、

戒為万善之基。出必由戸。若無此戒。諸善功徳皆不得生。（大正四八・九六五a）

であり、更に諸種の経論を依用して、持戒に止まらず仏典に説くすべての行業をもって成仏の因となすべきことを説示している。また修禅の有り方について、当時の禅徒は禅定三昧だけを成仏の因とし、自己の内心に仏を求めて専ら自身の心を清浄にすることをつとめたのであるが、これに対して延寿は、禅定のみに執着することなく、坐禅昏昧なるときはすべからく行道念仏をおこすべきであると策励し、坐禅と念仏を雙修すべきことを力説している。いま坐禅と念仏との関係については『浄土指帰集』巻上の「参禅念仏四料揀偈」の上に結昌せられ、この内第三句には、

有禅有浄土。猶如帯角虎。現生為人師。来生作仏祖。（続蔵二・一三・一・六八右上）

と述べて禅浄の融合を計ると共に、両者は各々途は異なれども悟に到達する道として帰一する所は全同なることを説示しているのである。このように延寿の教禅一致の戒学並に禅浄雙修思想は、まさに時代にふさわしい教えであり、当時の禅徒の有り方をも如実に物語っていると共に、彼等に受用され、後世に多大な影響をも及ぼすこととなった。

## 五

『宗鏡録』『万善同帰集』が識者向っての学門的な理論書であるのに対し、『警世文』『永明寿禅師垂誡』『示衆警策』等は一般世人への懇切なる啓蒙の書であり、当時の衆生の苦悩やその原因について余すことなく分析し、真の人間の有り方について述べている。彼は『警世文』の中において世態の無常、五濁の世相を示し、かく恐畏の世においては天寿を完うし、耳順を極めるまで生きることは万中の一であり、しかもその中に疾病災禍苦悩があり、浮生一月の中、口を開いて咲うことは只四五日のみと言っている。このような濁世において我々が迷を捨てて仁慈行善の道に帰することは、三界唯是一心を信じて禅定をもって冥合することであると述べ、最後において、

若能諦了自心。以此定慧相応。則能不動塵労。便成正覚。平生所遇。莫越於斯。普勧後賢。可書紳耳。（大正四八・九九八a）

と論断している。ここに、延寿が単なる学者として世に超然としていたのではなく、彼は自ら時代の人々と共に悩み憂い、

世人と共に仏道を求めようと志向した人であることが理解されよう。さて『永明寿禅師垂誡』には、

学道之門別無奇特。只要洗滌根塵下無量劫来業識種子。汝等但能消除情念。断絶妄縁。対世間一切愛欲境界。（大正四八・九九三b）

と述べ、学道をする我々の有り方を指摘するが、真正の導師に逢えば人中最大の因縁として勤心親近すべきであるとも言っている。また『永明寿禅師山居詩』（元禄十三年刊）には、

数朝興廃狂風過。　千載栄古製電飛。
早向権門思息意。　莫於塵世自沈機。

と述べ、ここに当時の世相への延寿の慨嘆と警告を看取できるのである。では、このような五濁悪世において我々のなせることは、延寿に依れば「誓断無染塵労。願生唯心浄土。」に他ならなかった。これを表明したのが『万善同帰集』であり、唯心思想を教禅会融させ重説したのが『宗鏡録』なのである。まさにこれらの著作は時代的要請から生まれたもの、また道機熟する所に時代が創り出したものとも言えよう。さらに小部の著作である『定慧相資歌』『観心玄枢』等もこのような立場から生まれざるを得なかった。『定慧相資歌』には、

勧諸子勿虚棄。光陰如箭如流水。散乱全因欠定門。愚盲祇為虧真智。真実言須入耳。千経万論同標記。定慧全功不暫忘。一念頓帰真覚地。（大正四八・九九七b）

と述べ、また、仏教の本枢は観心にあるとの所以を説いた『観心玄枢』には、

普勧後学。莫擲光陰。……非施功力。即凡心而見仏心。不動塵労。当肉眼而開法眼。……今得聞此重重委曲真実之談。若更不肯信入此総持観心法門。謂之大失。（続蔵二・一九・五・四三四右上）

と述べている。この様に「普ねく後学に勧む」との延寿の警めを思う時、彼の人間に対する見解は識者のそれと言うよりも、むしろ、一学徒一究道者の次元に自己を位置づけ、時代の人々と共に世相を直視認識しながらその生涯を仏祖道参究のために傾注した人と言えよう。

## 六

以上、延寿の伝記と著作成立の背景を通して彼の人間観について概観した。唐末五代の擾乱の世相に生きた彼は、正しき時代認識のもと、その中で生きざるを得なかった有情の真の有り様を絶えず模索し続け、時機相応の仏道を参究することから、単に自行のみにとどまることなく、殊に化他行の方面にその心血を注いだ近時類い稀なる特異な人物であった。これは一百八事の行修、七衆のために菩薩戒を授けたこと、施食放生を行なったこととあながち無関係ではあるまい。とにかく、延寿と同時代に生きた賛寧が彼をして利他行の人であると捉えていることは注意を要するが、禅門では彼を「法

檀越」といい、浄土門では「再生之善導」また「阿弥陀仏化身」と讃仰されていることは、「慈氏下生」とも言われる延寿自身に対する讃辞であるのみならず、そのことは彼の人間観をも顕わしているものと言えまいか。　（S49・11・11）